

# 英語サークル活動を積極的に行う大学生は 「優れた言語学習者」と言えるのか —学習者オートノミーの観点からの分析—

小林 浩明                      安部 祥子

(国際教育交流センター・北九州市立大学文学部比較文化学科卒業生)

## キーワード

優れた言語学習者   学習者オートノミー   自主学習時間   英語サークル

## 要 旨

大学生生活において英語サークル活動を積極的に行う大学生は、自主学習を行う「優れた言語学習者」と見られることが多い。しかし、サークル活動からの引退と同時に、英語学習もやめてしまう姿を見れば、彼らを「優れた学習者」と見ることに疑問が生じるであろう。本稿では、英語サークル活動を積極的に行っていた大学生の経験に耳を傾けながら、学習者オートノミーの観点から分析を行ったものである。その結果、サークル活動には長年の経験から培われた学習計画が存在し、それが固定化されることでメンバー一人ひとりが自身の英語学習を考えなくなり、学習者オートノミーが育てられていなかったことがわかった。そのため、サークルからの引退が英語学習をやめることに連動していた。

## 1. はじめに

「グローバル」がキーワードとなり、「国際語としての英語」の必要性が叫ばれるようになってから久しい。多くの大学では、グローバルと名の付く各種のプログラムが開発され、益々英語の重要性が訴えられている。一方、日本の英語教育は、国民の多くが中高の6年間も勉強してきたのに、全く使えないと長年批判を受けてきた。しかしながら、竹内（2007）によれば、日本の中高6年間における実質的な授業時間は630～650時間であり、英語を習得するためには極めて好ましい状況ではないことがわかる<sup>1</sup>。「英語を本気で身につけるためには、教室

の中だけの学習では不十分。教室の外に目を向け、そこで自主的に何をするのか。その内容と方法が成否の決め手（竹内 2007：2）」と言わざるを得ない。大学には、学生の自主的な活動としてのサークル活動があり、英語力に磨きをかけたい学生にとって、英語サークルは、魅力的なサークルの一つになっている。大学に入ったら、受験英語に別れを告げて、もっと実用的な英語力を身に付けたいと思っている大学生は多くいる。新しい学期になると、少しでも実用的だと思われる英語科目に履修登録したり、新しいテキストを購入したりして、やる気に満ち溢れた顔を探すことは容易なことであろう。しかしながら、その一方で、そのやる気を現実の学生生活の中で実行している人は、残念ながら少数派となってしまう。

A 大学の英語サークル B は、60 年以上の歴史を持ち、各界で活躍する OB や OG が大勢いる。過去にはディベートで世界大会に出場した OB もいるという。つまり、伝統のある英語サークルとして、名も実績もあるサークルと言える。A 大学の英語サークル B は、その本気度と活動の厳しさが知れ渡り、多くの新入部員と多くの脱落者を生んでいる。つまり、英語サークル B を継続している学生は、それだけ本気で英語の学習に取り組んでいると言えるのである。だからこそ、A 大学内で英語サークル B に所属していると言えば、ほとんどの教員も学生も非常に熱心な英語学習に取り組む「優れた言語学習者 (Good Language Learners: GLLs)」<sup>ii</sup>だと認識するのである。

しかし、サークル活動を積極的に行う大学生であれば、それは本当に「優れた言語学習者」と言えるのだろうか。筆者らがこのことに疑問を持つようになったのは、A 大学の英語サークル B で積極的に英語学習に取り組んでいた人たちが、3 年生後期に英語サークル B を引退した後で全く英語学習をしていないという実態を知ったからである。そして、反対に英語サークル B を途中で辞めた 13 人中 12 人が何らかの形で英語学習を続けている。

そこで、本稿では、英語サークル活動を積極的に行うことが必ずしも「優れた言語学習者」の証とはならないことを、学習者オートノミーの観点から考察を加えたい。特に、本研究では、A 大学の英語サークル B という大学生による英語学習のサークル活動における C さんの実際の経験をもとに研究を行う。また、大学生の語学サークルにおける英語学習に関する先行研究は多くないので、この点においても意義を見出せる。

## 2. 優れた言語学習者から学習者オートノミーへ

### 2.1. 優れた言語学習者と学習ストラテジー

「優れた言語学習者 (Good Language Learners: GLLs)」の包括的な先行研究に竹内 (2003) がある。この研究では、大学生に対する質問紙調査と学習記録、達人に対するインタビュー

調査及び、成功者が表した書籍を質的に研究し、別途量的アプローチで行った研究成果を加えて、どのような学習方法・行動が GLLs に共通しているかを探っている。竹内 (2003) によれば、GLLs の本格的な研究に最初に取り組んだのは、Rubin, J. であったが、「学習者が自らの目標を設定し、環境を整備し、活動をおこない、その成否の責任を負う、という自律的学習 (Autonomous Learning)、あるいはその基礎となる学習計画や環境整備に関する「メタ認知」 (Metacognitive) 方略につながる考え方」を初めて明示的に提示したのは、Stern, H. H. である。その後、GLLs が使用するストラテジーの研究に端を発した言語学習ストラテジー研究であったが、欧米のストラテジー研究の多くは、ストラテジーの習得が自律学習へとつながるという前提に基づいて研究を進めている (竹内 2003)。一方、日本においても、尾関・大和・中島・廣森 (2005) 及び大学英語教育学会学習ストラテジー研究会 (2006) により、自律学習を実現するために学習ストラテジーを積極的に用いる指導法が紹介されている。

しかしながら、自律学習のために学習ストラテジーを訓練するという考え方には異論がある (田中・斉藤 1993)。例えば、多くの人にとって、学習ストラテジーを変えるだけでは、学習の改善が生じなかった経験を持っているはずである。それは、学習者にとって意識的にせよ無意識にせよ自分の身につけているストラテジーが楽なストラテジーであるからだ (田中・斉藤 1993)。つまり、「新しいストラテジーを身につけるには、学習者によほどの覚悟がある (田中・斉藤 1993: 54)」のである。学習の改善のために学習ストラテジーを訓練するという考え方は、学習上の困難を学習ストラテジーに矮小化してしまう恐れがあるのである。

またもう一つの側面から言えば、教師の用意したストラテジーに従っているだけでは、一見それが教師の手から離れて自律的に学習しているように見えたとしても、それは形式的にそのように見えるだけであり、学習者の学びとはならない。大切なのは、「学習者が英語学習において行為主体者になること (中田 2015: 35)」である。そして、学習者が自らの学習において行為主体者となるためには、「教師主導の学習」から「学習者主導の学習」へと学習モードの変換をすることが必要となる (中田 2015)。

## 2. 2. 学習者主導の学習と大学生の学習時間

大学生の学生生活の過ごし方から学習時間を調査した研究に溝上 (2009) や畑野・溝上 (2013) がある。大学生の学習時間は、大学で授業や実験に参加する「授業内学習時間」、授業に関する復習、課題・宿題などを行う「授業外学習時間」、そして、授業とは関係のない勉強を自主的に行う「自主学習時間」に三分される。英語サークル B のような学習時間は、この自主学習時間にあたりと考えられる。溝上 (2009) によれば、「授業内学習時間」「授業外学習時間」「自主学習時間」の多い大学生ほど学生生活に充実感を覚え、学習意欲も高いことを明らかにして

英語サークル活動を積極的に行う大学生は「優れた言語学習者」と言えるのか

いる。英語サークル B のメンバーが GLLs と見られるゆえんであろう。

### 2.3. 教室の内外における学習者オートノミー

外国語能力を伸ばすためには、限られた教室内での学習に加えて、教室外での学習が必要である。しかし、教室外の学習には、「教室外学習」、「学校外学習」、「非公式な学習」、「指導によらない学習」など全てが「何とかではない」という言い方になってしまっており、使われている用語からして学習における教育機関や正規な指導のプロセスの重要性を言明している（ベンソン 2011）。

その一方で、学習者オートノミーの発揮があつてこそ、教室外の学習を実現することができるのだが、学習者オートノミーの育成における教師の役割の大きさも指摘されている（青木・中田 2011）。つまり、ある時点において高い学習者オートノミーを持った学習者は、教師のサポートがなくても学習の実行が可能であるが、同じ時点において、高い学習者オートノミーを持っていない学習者は、教師のサポートなしでは学習者オートノミーを伸ばすことが難しいため、学習の実行が困難になるということである。

学習者オートノミーを育て、学習者オートノミーを生かす学習に自己主導型学習（Self-Directed Learning: SDL）がある。ノールズ（2005）によれば、SDL とは、「他者の援助をうけるかどうかにかかわらず、学習者のニーズの自己診断、学習の到達目標の設定、学習のための人的・物的なリソースの特定、適切な学習方法論の選択・実施、学習成果の評価について、個人が主導権をもって行うプロセス（ノールズ 2005：23）」を示している。SDL は、決して周囲から孤立して一人で学習することではなく、むしろ、教師やアドバイザー、メンター、チューター、リソースとなる人々など自分の学習をサポートしてくれる人と協働で行うものであり、「自己主導的な学習者のグループは、非常に相互的な関係で成り立っている（ノールズ 2005：23）」と言える。

## 3. 研究方法

本研究では、学習者に関する研究は、当事者である学習者の声に耳を傾けることが最も重要であると考え、当事者の経験に基づき、当事者の視点から当事者の経験を分析するものである。具体的には、ある地方小規模総合 A 大学の文系学部に入籍した C さんの英語サークル B における経験である<sup>iii</sup>。

C さんが大学に在籍したのは、2011 年 4 月から 2015 年 3 月までの間であり、英語サークル B には入学当初から 3 年次後期の引退期まで在籍している。C さんが英語サークル B に参加

した理由は、Cさんが中学校の英語教師になりたいと思っていたからであり、そのためには、大学の授業だけでは学習時間が足りないと考え、授業以外でも英語を学ぶ必要があると考えたからだ。英語サークルBは、サークルとは言え、活動への出席義務があり、そのように厳しいサークルであれば、高校時代の部活動と同様に、英語を頑張ることができ、英語力が確実に伸びるだろうと期待していた。しかし、2年生に上がる前に同学年の多くが退会したこと、行事の実行委員というサークルの運営面での仕事、2年生からは教職課程の授業が増え、今まで以上に忙しくなることに不安を感じるようになった。それに加えて、Cさん自身が英語サークルBを続けて何をしたいかわからなくなり、活動を休むか、退会しようと思った。しかし、先輩から「なぜ辞めるのか」について深く責められ、その状況に面倒くささを感じ、辞めることを認めてもらえないからという理由で英語サークルBを継続することになった。また、退会したかったが、英語サークルBを辞めることで英語学習も辞めてしまうかもしれないと不安に思っていた。3年生になると、執学年間ということで辞めるという選択肢が認められていなかったため、退会に関しては何も考えられなくなった。Cさんの中で、もはや辞めるなんてできないことだと最初から諦めていた。それは、3年生は2年生次の改選が始まる前に、今後3年生の引退までサークルを続ける意思がある者だけが残るように言われ、自分で残ることを決めたCさんの責任感からだった。結局、Cさんは3年後期の引退時期まで英語サークルBを続けた。

#### 4. 英語サークルBの活動と学習構造

##### 4.1. 英語サークルBの活動

英語サークルBの特徴は、日本人大学生が特定の指導者のいない中で、大学生同士で自主的に英語を学習するという点だ。平日の昼休みは毎日集まり、35分間、自分たちで作ったオリジナルの教材を使って学習をする。そして、前期の4月から7月は平日の夜間6、7限の時間帯にメンバーが集まり、サークル内でのコンテストに向けて、発音やディベートの練習をする。授業で夜プラクティスに参加できない場合は、授業のない空き時間で練習を補う二部プラクティスという制度がある。夏季休業中は、9月に5泊6日英語のみを使って生活する合宿を行う。このような合宿は春にも行われる。そして、後期は、自分の興味があるセクションに入り、そこでさらなる英語能力の向上を目指す。所属するセクションによって差はあるが、週に2回程セクションのメンバーで集まり、約3時間英語学習を行う。年間のスケジュールを表1に示した。英語サークルBに所属していれば、膨大な英語の学習時間を確保と共に英語を学ぶ仲間を得ることができる。

英語サークル活動を積極的に行う大学生は「優れた言語学習者」と言えるのか

表 1 英語サークル B の年間スケジュール

全体行事			
4月	・グループ結成	10月	・昼プラクティス ・夜プラクティス ・高校生スピーチコンテスト
5月	・昼プラクティス ・夜プラクティス ・シニアレシテーションコンテスト ・フレッシュマンレシテーションコンテスト	11月	・改選
6月	・昼プラクティス ・シニアディベートコンテスト ・チャンピオンディベート	12月	・3年生引退・新グループ結成
7月	・昼プラクティス ・夜プラクティス ・フレッシュマンディベートコンテスト ・夏期英語強化合宿グループ結成	1月	・昼プラクティス
8月		2月	・昼プラクティス
9月	・夏期英語強化合宿	3月	・春期英語強化合宿

#### 4. 2. 英語サークル B の学習構造

英語サークル B のメンバーが「自主学習時間」として英語学習を行っていたのであれば、それは自己主導型の言語学習と言える。マレー (2011) によれば、自己主導型言語学習を支える学習構造は、「計画立案」「取り組み」「サポート」「内省」「マネジメント」「個人化」の6つの要素を備えていることが求められる。

表 2 自己主導型言語学習を支える学習構造

計画立案	学習者が自分の学習計画を作成する。初めに自分自身の目標を設定し、リソースを選び、学習活動を定める。どのように進歩をモニターし、成果を評価するについても決定する。
取り組み	学習者は、多様な活動に置いて幅広い学習のリソースと直接取り組むことを通して言語スキルを伸ばす。言語の授業はない。
サポート	学習者はクラス全体の説明、一対一のアドバイジング・セッションや学習者同士のやりとり、ストラテジー・ガイドの印刷物を読むことを通して、学習をどのように計画し、実行するかについての知識を発達させる。
内省	学習者は自分の学習について内省することを継続的に推奨される。内省は計画、モニター、自己評価の過程の重要な要素である。
マネジメント	学習者は学習の全ての側面に関する決定をする。また長期の学習計画、日々の学習活動、学習過程の内省、学習の証拠について書面で記録を残す。これらの情報は学習のマネジメント、モニター、評価において重要な役割を果たすポートフォリオに蓄積される。
個人化	学習者は、個人のニーズ、関心、学習スタイルに基づき、決定を行う。例えば何をやるか、どのように行うか、どのくらいの期間行うかについて決定する。自分自身のペースで進めていく。

(マレー 2011 : 125)

英語サークル B の学習構造は、表 3 のようになる。

表 3 英語サークル B の学習構造

計画立案	学習者が学習の計画を作成するかは、学習者個人に任せられている。英語サークル B 内で行うメンバー間でのコンテストの場合、実行委員長がスケジュールを組み立て、メンバーに提示する。何をいつまでにするという計画の立て方のため、それに従って活動を行うものがほとんどである。
取り組み	学習者は英語サークル B 独自の様々なプラクティスという教室内で行う学習を通して言語スキルを伸ばす。英語を実際に使って活動することを重要視している。
サポート	1 年次は上級生からサポートされるという位置づけになっている。2 年次以降は、自分自身の英語サークル B での経験から新入生をサポートする立場になる。英語学習についてメンバー同士で相談することはなく、英語サークル B での活動における相談が主になっている。
内省	プラクティス後に他のメンバーからももらったアドバイスをもとに、改善することを推奨される。
マネジメント	過去の活動を参考に、執行学年が活動を計画し、行事ごとに各実行委員長が練習計画を立てる。他のメンバーはそれに従い、活動することが求められる。活動をスムーズに行うことが優先される。
個人化	自分の興味あるセクションに所属し、活動する。しかし、英語サークル B での全体行事を優先させることが決まりとなっている。

自己主導型言語学習を行うためには、学習環境としての英語サークル B が、それを支える学習構造を備えている必要がある。英語サークル B の学習構造は、メンバーが自分たちの学習について考える機会も、それを決定する機会もほとんどない。長年の伝統と実績から英語サークル B では、英語学習とは何をどのようにするものであるのかが予め決められていることがわかる。そのため、メンバー一人ひとりが自分自身の英語学習を考えることよりも、英語サークル B で定められた活動を行うことが英語学習であるという考えになってしまっている。

## 5. 英語サークル B を途中で辞めた学習者

### 5.1. 英語サークル B と英語学習

Cさんと同学年で、英語サークル B を途中で辞めたのは、13 名（人文系 7 名、社会科学系 6 名）である。このうち 12 名が、英語サークル B を途中でやめた後も、英語学習を継続していた。以下は、退会者の退会後の英語の学習方法である。（専攻・サークル B での活動歴）

- ・教員との英会話、自宅で、または仲間と TOEIC の勉強（人文・9 カ月）
- ・好きな洋画（英語字幕）を観たり、洋楽を聞いたり（歌詞を見ながら）する→分からない単語は調べる。

英語サークル活動を積極的に行う大学生は「優れた言語学習者」と言えるのか

- ネイティブが使うフレーズ（CD付き）を聞きながら真似る（社会・8カ月）
  - ・TOEICの勉強、CNNのニュース、語学研修（人文・8カ月）
  - ・英検の問題集、英語帳で語彙確認する（人文・8カ月）
  - ・IELTの点を取るために、四技能の勉強（交換留学のため）。
- BBCのラジオ、洋楽でリスニングの勉強。英語の小説（リーディング能力向上のため）  
（人文・18カ月）
- ・BBCのドキュメンタリー番組、外国人の彼氏との会話練習、英字新聞を読む（社会・11か月）

英語サークルBを途中で辞めた後も、継続して英語学習を行っているところから、英語学習に対するやる気が失われたために、英語サークルBを辞めたわけではないことがわかる。そして、英語サークルBで行っていた学習方法を継続している者が見られなかったことから、英語サークルBを辞めた理由の中に、自分の学習したい方法で学習できるかどうかに関係したいたことがうかがえる。前節で見たように、英語サークルBは、長年の伝統の中で、英語サークルBとしての活動が確立されており、メンバー個人の意見は反映されにくい構造を持っている。そのため、学習者オートノミーを発揮したい者にとって、英語サークルBは窮屈な場であったと言えるだろう。

## 5.2. 途中で辞めた学習者から見た英語サークルB

Cさんにとって仲の良かった英語サークルBのメンバーの多くが辞めていった。退会した後も交流は続き、その時の話題は英語サークルBのことになることが多かった。その際、全員に共通していた点は、英語サークルBを退会したことに少しも後悔していないという点だった。後悔がないと語る退会した友人の姿にCさんは羨ましさを感じていた。

Cさんが特に英語サークルBの中で仲が良かったのは、人文系の学生Dさんであった。Dさんは英語サークルBで8ヶ月活動していた。CさんとDさんは同じグループ、セクションであったため、一緒に過ごす時間が多く、CさんはDさんを身近で見ている。Cさんにとって、Dさんは英語サークルBの中でもかなりの努力家で、その努力を周りの誰もが認めていた。「積極的に英語を学ぶDさんの存在が私にやる気を与えてくれていた」とCさんは述懐する。

Dさんは、退会にかなり迷っていたため、3カ月程先輩との話し合いを重ね、最終的に休会ではなく、退会した。そこまで迷っていたDさんだったが、やはり、自分の決定に後悔はなかった。Cさんが4年次にCさん自身の経験を卒業論文として執筆するにあたり、Dさんに英語サークルBへの不信感を相談し、Dさんが英語サークルBについてどのような見解を持っている



かを尋ねた。その内容が以下のものである。

難しいね。私は 自律の程度は個人によって異なると思うよ。  
Bに入っても1人で目標を決めて、勝手に勉強していく人もいる。こっちは少数かなあ。  
一方では、やることを提示されて、それが自分にとってどうプラスになるかとか、意味も考えずに勉強する人もいる。こっちが大部分かな。  
主観でしかないけど、ひたすら勉強をしているだけに見えて、本当は自分で考えて勉強しているわけではない。それで、それに満足している人が集まっている集団だと感じることはあるよ。人によっては自律して勉強できている人もいると思うけど、そうでない人が多すぎる集団。というのが私の回答かな。  
自律してできてる人は、普通辞めると思うけど。

「自律してできている人は、普通辞めると思うけど」というDさんの発言から、途中退会者が退会後も自分で英語学習を継続していることは至極当然のことのようである。つまり、学習者オートノミーの高い人ほど英語サークルBを辞め、自分で学習していくという姿が鮮明に見えてくる。

## 6. 考察：英語サークルと学習者オートノミー

英語サークルBが英語学習にやる気のある学習者が集まっていることは事実である。そして、高校までの学校教育の中で英語の成績が良かった者が多い。言い換えれば、学校教育の中で自身の英語学習を評価されてきた者である。しかし、サークル引退後に英語学習の継続をしていない点を考えると、GLLs と言うことはできないだろう。厳しいサークル活動に熱心に取り組むことは、英語学習としてどのような意味を持っていたのだろうか。

大学は、学生の自主性が求められており、サークル活動も同じく自主性が求められる活動である。しかしながら、英語サークルBは、メンバー一人ひとりの動機づけに影響を受けず、サークルに入ることによって学習時間が長くなる仕組みがある。それは、中学校や高校で授業があり、宿題があり、受験勉強があり、それに従うことで自ずと学習時間が長くなったように、英語サークルBのように、学習方針や学習計画、学習方法の決まっている場合、それに従うことで学習時間が長くなるからである。このように考えると、英語サークルBでの学習時間は、「自主学习時間」というよりも「授業外学習時間」になっているのかもしれない。

英語サークルBは、長年の伝統から培われた英語を学ぶためのしっかりした制度があり、大学生の自主的な学習を行うには、理想的な環境と思われる。しかしながら、その一方で、サークルBは独自の方針を持つことで学習者に選択の幅を与える余地がない。つまり、学習

英語サークル活動を積極的に行う大学生は「優れた言語学習者」と言えるのか

者は意味のある選択の機会を与えられなかったことで学習者オートノミーを育てられなかったのである（青木・中田 2011：10）。

その結果、英語サークル B は、学生の自主的な参加によるサークル活動であるにもかかわらず、厳しい入会条件と固定化された学習計画によって、各メンバーの意志を反映することが非常に難しい学習環境となった。そのことが明確な指導者が不在であっても、学習者による自己主導型の言語学習の実現を遠ざけてしまったのだろう。つまり、名称は、サークル活動ではあっても、メンバーにとっては、授業と何ら変わりのないものとして位置付けられ、時間が終了することで学習も終わってしまったのである。

## 7. おわりに

「学ぶ」という事象はたいてい、学校で起こることとみなされています。けれども、学校の中で起こっているのは、実は「教えられること」なのです。（ノールズ 2005：21）

学校教育の中で良い成績を取れた人は、自分を「優れた言語学習者」だという認識を持ち、自分の学習方法に疑問を持たないかもしれない。しかし、それは「教えられること」に優れた「受動的学習者」なのであり、決して学習の主導権を持つ「能動的学習者」ではない。英語サークル B を最後まで続けながら引退後に英語学習をやめてしまった人と、英語サークル B を途中で辞めながらもその後も英語学習を継続した人との違いがここにある。

受動的学習者が能動的学習者になるためには、自分自身が学習の主人公であるという認識を持つことである。人の個性が強調される時代において、同様に学習の個性が認められるべきである。そのための第一歩として「なぜ〇〇語を学習するのか」を問えるような学習環境を構築する必要があるだろう（山内 2015）。なぜなら「なぜ〇〇語を学習するのか」という問いは、「私の人生」という視点から発せられる問いであり、それに応えることにより、個々の生涯における固有の〇〇語学習の意味付けが見出されていくからだ（山内 2015）。言い換えれば、授業やサークル活動を積極的に行うだけでは外国語学習の意味付けができるようにならず、「優れた言語学習者」とは言えないのである。

## 参考文献

- 青木直子・中田賀之（2011）「学習者オートノミー」青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー - 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房
- 尾関直子・大和隆介・中島優子・廣森友人編（2005）『言語学習と学習ストラテジー - 自律学習に向けた応用言

- 語学からのアプローチ』リーベル出版
- 大学英語教育学会学習ストラテジー研究会編（2006）『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』大修館書店
- 竹内理（2003）『より良い外国語学習法を求めて』松柏社
- 竹内理（2007）「自ら学ぶ姿勢を身につけるには—自主学习の必要性とその方法を探る—」『TEACHING ENGLISH NOW』Vol.8 SPRING、2-5
- 田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際 - 学習支援システムの開発』大修館書店
- 中田賀之（2015）「学習者のオートノミーとは何か」中田賀之編『自分で学んでいける生徒を育てる - 学習者オートノミーへの挑戦』ひつじ書房
- ノールズ、マルカム・S／渡邊洋子監訳・京都大学SDL研究会訳（2005）『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド - ともに創る学習のすすめ』明石書店
- 畑野快・溝上慎一（2013）「大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検証」『日本教育工学会論文誌』37（1）、13-21
- ベンソン、フィル／トムソン木下千尋訳（2011）「教室を超えた言語学習の場の考察」青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー - 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房
- マレー、ギャロルド／松下達彦訳（2011）「セルフアクセス言語学習」青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー - 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房
- 溝上慎一（2009）「「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 - 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』第15号、107-118
- 山内薫（2015）「生涯学習／教育としての日本語教育を目指して - フランスの大学における日本語学習の離脱者の事例から」立教日本語教育実践学会『日本語教育実践研究』第2号、28-44

## 注

- i これが仮に1年間で同時間の授業を受けていたら、初心者でも中級レベルに達するだろうという予測を日本語教育関係者なら立てられるはずである。
- ii Good Language Learner の訳には、「良い言語学習者」「外国語学習成功者」もあるが、本稿では、『外国語教育大事典』に従い、「優れた言語学習者」を用いる。
- iii Cさんの匿名性を確保するために、Cさんの作成した卒業論文（未刊行）については、参考文献に情報を掲載しない。

